『2026年難波別院カレンダー』5月のことば

ありがとうの ひとことが 人の心を 豊かにする

松下　幸之助

ありがとうの一言にも色々ある。私へ向けたありがとうや私からのありがとう。後者には口にするものもあれば、心に呟くものもある。私にとって忘れられない心満たされるありがとうは、どれも私が心に呟き、噛みしめたものであった。

その一つに友人へ向けたものがある。地元を離れた中学生時代、人見知りもあり、私はなかなか周りに馴染めずにいた。そんなある日、いつも通り一人で帰路につこうとする私を同級生が呼び止めた。「一緒に帰ろう」。思いがけない言葉をかけられた。その時は「うん」と頷いただけであったが、どれほど心にありがとうを噛みしめたことか。

学生生活の中で、はじめて居場所をもらったような気がした。彼とは今や三十年来の友人である。

親に対するありがとうもある。社会人となり実家を離れるとき、母親が家の前で私が見えなくなるまで見送ってくれた。母親の「いってらっしゃい」に「いってきます」とだけ返したが、心の中ではありがとうを呟いていた。

親が私に居場所を与えてくれていた。実家を後にするときの母親の姿にそう感じた。

心を満たすありがとうを思い返していくと、自分が本当に求めているものを教えられるように思う。私の場合、どうやらそれは私の居場所のようである。

（大阪教区教化センター）

今月のことば

弥陀の浄土に帰しぬれば
すなわち諸仏に帰するなり
一心をもちて一仏を
ほむるは無碍人をほむるなり

「あなたの一番大切なことはなんでしょう？」この問いを投げられた時、何を思い浮かべるでしょうか。ここで阿弥陀様やお念仏だと本心で答えられる方は少ないと思います。現実的に考えるほど、家族、健康、名誉、人によってはお金など色々と大切なものがあります。この大切なものが拠り所となり、仕事や生活をより一生懸命に生きて行くことが出来ます。

この和讃を初めて称えさせて頂いたのは、私がご法事に寄せて頂いた時でした。自坊では大無量寿経拝読後の和讃として必ずお称えします。初めは正直に申しますと意味がよくわかりませんでした。しかし何度も何度も称えさせて頂くうちに、少し感じるものがありました。

お釈迦様の教えに「諸行無常」という言葉があります。これはこの世のすべてのものは絶えず変化していくものという教えです。自然や人が造り出した物、人の命でさえ常に変化し、決して不変ではありません。

我々は平穏で変わらない毎日を望みます。しかしお金は使えば無くなり、病気にかかれば健康は失われます。非常に残酷で辛い現実でありますが、大切な家族も歳を取り、必ず別れの時がきます。不変ではないものを拠り所とし、執着してしまうと失った時の悲しみは計り知れません。

「弥陀の浄土に帰しぬれば」とありますが、不変の拠り所こそが阿弥陀様の教えだと親鸞聖人は書かれておられます。時代が変わっても、自分の状況が変化しても阿弥陀様の教えは変わることはありません。今の時代は、情報が多く迷いやすい時代です。迷いが多い時代だからこそ、「不変の教え」が大切となるのではないでしょうか。

和讃の最後に「無碍人」とあります。無碍人とは惑わされることのない道を歩む人という意味があります。情報が多い現代では惑わされず生きることは簡単ではありません。しかし拠り所を失い絶望を感じたとしても、そのたびに変わらないものなどないのだと教えてくださるのが阿弥陀様の教えであります。

私も現実に起こることに惑わされず、不変の教えを拠り所とした道を歩みたいとこの和讃から学ばせて頂きました。

（藤原　玄）

今月のことば出典『浄土和讃』
『真宗聖典』（初版）４８２頁
（第二版）５７７頁
『増補　真宗大谷派　勤行集』
（青本）１２６頁

〈知ってる？ 仏事のあれこれ〉

「永代経」ってなぁに？

～つないでもらったご恩とともに～

泉佐野市　西方寺　松山　大介

薄い折り紙を42回折ると、その厚さは月に届く、という話をお聞きになったことはあるでしょうか？最初はわずかな数字であるものが、2倍、4倍…と膨大な数字になっていくのです。

人の世代にも言えることですが、皆様のご両親、さらにそれぞれのご両親、その前にはさらに二人ずつのご両親がおられ、と数えていくと、代を遡るにつれ、まさに月にものぼる数になるでしょう。

血縁だけでそうなのですから、血縁問わず今の自分に「仏法」を届けてくれた方々の数はその比ではないのだろうと思います。

先代の住職はお参りの際、過去帳について「誰も書かれていない日もあるが、そこにはあなたが直接知らない無数の方がおられます。毎日めくりなさい」と伝えていたそうです。それを知ったのは先代が亡くなった後のことでしたが、教えてくれたご門徒がその言葉どおりに毎日過去帳をめくる姿に、先代の思いの片鱗を見たように思いました。また、そのことを通じて自分自身にも先代の思いが伝わってきました。

私たちは皆、ひとりでに突然手を合わせるようになったわけではないでしょう。先達の背中を見て、それに感化されてお内仏、ご本尊の前に手を合わせるようになったのではないかと思います。それは確かに、無数の世代を越えて自分の元まで「仏法」が届いていることの証なのではないかと思うのです。永代経はお浄土に還られた有縁の方をきっかけとして、自分自身にまで届いた仏法への感謝と、さらに未来へその法脈が続くように「これまで」と「これから」に願いを馳せるものである、と自分には感じられるのです。

先日、今年度の永代経の前に、自坊の仏具磨きが行われました。一人のご門徒が「次は永代経で来るわね」と仰って帰られたのですが、それを最後に永代経の前日、突然お浄土に還られてしまいました。いつでもお寺の行事に顔を出してくださる方で、入寺10年も経たぬ自分にとってもずっと背中を見せてくれた方でした。自坊の永代経の後、そのまま申し合わせて当日のお通夜に参列しようと相談されるご門徒の皆さんの姿に、またひとつ仏縁を感じさせていただきました。

仏教マンガ・仏さまのおしえ

絵：小川ゆきえ〈250〉